

学校図書館司書教諭コース開講科目

科目コード	科目名	ページ
5601	学校経営と学校図書館	1
5602	学校図書館メディアの構成	2
5603	学習指導と学校図書館	3
5604	読書と豊かな人間性	4
5605	情報メディアの活用	5

科目コード	科目名	添削者名
5601	学校経営と学校図書館	岡田 大輔
<p>使用テキスト 学校経営と学校図書館</p> <p>著 者 名 岡田大輔 発行所 近畿大学通信教育部</p>		
<p><b>設題（字数指定 2,000字）</b></p> <p>まず、学校図書館を訪問し、見学してください。レポートには、最初にどのような学校かと学校の合計クラス数を記述した上で、その学校図書館の、校内での場所や広さ・所蔵冊数・学校司書の配置の有無・学校図書館での司書教諭の仕事内容・授業での利用頻度などの現状と、自分が感じたことについて、テキストの内容と比較し説明してください。そして、もしこの学校の司書教諭となった場合、司書教諭として何をすればよりよい学校図書館となるか、何をしてみたいか、いくつか具体的に提案してください。</p>		
<p><b>レポート作成時の留意事項・ポイント（参考文献の記入または添付要）</b></p> <p>まず、教科書の「学校図書館の見学」の章を読んでください。大学の「よくわかる！」動画（<a href="https://youtu.be/NBoz05fxJZc">https://youtu.be/NBoz05fxJZc</a>）も参考になるでしょう。訪れる学校図書館は、勤務校の学校図書館でも、近所の学校の学校図書館でも、遠くの有名な学校図書館でも構いません。見学の際には、できれば司書教諭や学校司書に簡単にでも話を伺ってください。</p>		
<p><b>総評基準についてのメッセージ</b></p> <p>「学校図書館での(学校司書ではなく)司書教諭の仕事内容が書かれているか」「現状とテキストが比較されているか」「実現可能な提案がなされているか」「提案の内容は司書教諭が行うべきことか」の4点は重要です。</p>		
<p><b>参考書等の紹介</b></p> <p>東京・学校図書館スタンプラリー実行委員会 東京・学校図書館スタンプラリー  <a href="http://tokyohslib.ehoh.net/">http://tokyohslib.ehoh.net/</a></p> <p>兵庫学校図書館スタンプラリー実行委員会 兵庫 学校図書館スタンプラリー  <a href="http://hlibrary.kgjh.jp/">http://hlibrary.kgjh.jp/</a></p> <p>全国学校図書館協議会  学校図書館整備施策の実施状況  「学校図書館整備施策に関するアンケート 市区町村別回答」  <a href="https://www.j-sla.or.jp/material/research/post-45.html">https://www.j-sla.or.jp/material/research/post-45.html</a></p> <p>全国学校図書館協議会フランス学校図書館研究視察団  『フランスに見る学校図書館専門職員：ドキュメンタリスト教員の活動』  全国学校図書館協議会 978-4793322488</p> <p>全国学校図書館協議会オーストラリア学校図書館研究視察団  『オーストラリアに見るコミュニケーション力を培う学校図書館』  全国学校図書館協議会 978-4793322471</p>		

科目コード	科目名	添削者名
5602	学校図書館メディアの構成	吉植 庄栄
<p>使用テキスト 学校図書館メディアの構成</p> <p>著 者 名 高橋 元夫 発行所 近畿大学通信教育部</p>		
<p><b>設題（字数指定 2,000字）</b>  学校図書館メディアの構築の各段階（選択・収集、組織化、維持・管理）において、司書教諭が心得ておくことと具体的に行う業務について説明しなさい。各段階それぞれの手順や方法、注意点も踏まえて説明すること。校種（小学校・中学校・高等学校など）を限定して説明しても構わない。</p>		
<p><b>レポート作成時の留意事項・ポイント（参考文献の記入または添付要）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文章でまとめること。箇条書きや単語の羅列は再提出とする。</li> <li>・引用した言葉や文章は引用符に入れ、出典を必ず明記するとともに参考文献欄を文末に付けること。</li> <li>・参考文献は、書名・著者名・出版社・出版年を記入し、本文中に引用した場合は引用箇所も明記すること。</li> <li>・ウェブサイトを参照した場合はウェブサイト名とURL、最終参照日を記載すること。</li> </ul>		
<p><b>総評基準についてのメッセージ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・設題と解答が合致しているかどうか</li> <li>・基本的な用語を理解しているかどうか</li> <li>・論旨の一貫性</li> <li>・レポートの体裁（構成、誤字・脱字、引用参考文献一覧等）</li> </ul> <p>について総合的に評価します。提出前に必ず確認してください。</p>		
<p><b>参考書等の紹介</b></p> <p>米谷優子、呑海沙織 編著  学校図書館メディアの構成 放送大学教育振興会 9784595323621</p> <p>田窪直規 編著、飯野勝則、小林康隆、原田智子、山崎久道、渡邊隆弘 著  情報資源組織論 三訂 樹村房 9784883673391</p> <p>馬場俊明 編著 図書館情報資源概論 三訂版 JLA図書館情報学テキストシリーズⅢ 8)  日本図書館協会 9784820423096</p> <p>高橋知尚 著 学校図書館メディアの選びかた（シリーズ はじめよう学校図書館 2）  全国学校図書館協議会 978-4793322822</p> <p>大平睦美 著 学校図書館をデザインする - メディアの分類と配置  （シリーズ はじめよう学校図書館 4）  全国学校図書館協議会 978-4793322846</p>		

科目コード	科目名	添削者名
5603	学習指導と学校図書館	武田 江美子
使用テキスト	学習指導と学校図書館	
著者名	梅本 恵・永井悦重	発行所 近畿大学通信教育部
設題（字数指定 2,000字）	探究的な学習において、学校図書館を活用する意義について述べなさい（2000字）	
レポート作成時の留意事項・ポイント（参考文献の記入または添付要）	テキストだけでなく、下記の参考書やテキストに掲載している参考文献等も読んで考察すること。テキスト及び参考文献等から引用する場合は、『学習の友』を参考に引用箇所と出典を明確に記すこと。	
総評基準についてのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テキストの内容を理解しているか。</li> <li>・設題で求めていることについて考察することができているか。</li> <li>・論点を明確にして自分の言葉で述べているか。</li> <li>・引用は適切か。</li> <li>・テキスト以外の参考文献を読むなどして学習できているか。</li> </ul> 以上のことを重視します。	
参考書等の紹介	<p>塩見 昇 著 学校図書館の教育力を活かす - 学校を変える可能性 日本図書館協会 978-4-8204-1613-5</p> <p>渡邊重夫 著 批判的思考力を育てる学校図書館 青弓社 978-4-7872-0073-0</p> <p>塩谷京子 著 探究の過程におけるすぐ実践できる情報活用スキル55 ミネルヴァ書房 978-4-623-08445-6</p> <p>学校図書館問題研究会 編 学校司書って、こんな仕事 かもがわ出版 978-4-7803-0699-6</p> <p>日本図書館協会図書館利用教育委員会 編 図書館利用教育ガイドライン合冊版 - 図書館における情報リテラシー支援サービスのために 日本図書館協会 978-4-8204-0115-5</p> <p>日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会 編 図書館ハンドブック 第6版補訂2版 日本図書館協会 978-4-8204-1609-8</p> <p>日本図書館協会図書館の自由委員会 編 「図書館の自由に関する宣言1979年改訂」解説 第3版 日本図書館協会 978-4-8204-2202-0</p> <p>野口武悟 著 変化する社会とともに歩む学校図書館 勉誠出版 978-4-585-20081-9</p> <p>根本 彰 著 教育改革のための学校図書館 東京大学出版会 978-4-13-001008-5</p>	

科目コード	科目名	添削者名
5604	<b>読書と豊かな人間性</b>	杉本 ゆか
<p>使用テキスト 読書と豊かな人間性</p> <p>著者名 杉本ゆか・齋藤理一郎 発行所 近畿大学</p>		
<p><b>設題（字数指定 2,000字）</b>  学校種と学年を限定し、また、児童（もしくは生徒）の特徴に応じた「学校図書館を活用した児童・生徒の読書を推進させるための活動案」を考え、提案しなさい。  オリジナルで主体的かつ具体的な提案をおこなうこと。</p>		
<p><b>レポート作成時の留意事項・ポイント（参考文献の記入または添付要）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参考文献については、本文ではなく、別途設けられている記入欄に記載すること</li> <li>・参考書の紹介はないが、適宜、インターネットで参考になる資料や動画等を探して自分がレポートを書く際の参考にすること</li> </ul>		
<p><b>総評基準についてのメッセージ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代では、学校においては、一人一台の時代です。  紙ベースのみならず、デジタルも含めた案でも筋道が通っていて、きちんと設題を満たし、読書に有意であると判断できれば受け入れますので紙だけにこだわらず、幅広い視野をもって課題に取り組んでください。</li> </ul>		
<p><b>参考書等の紹介</b></p>		

科目コード	科目名	添削者名
5605	情報メディアの活用	小畑 信夫 菅 修一
<p>使用テキスト 情報メディアの活用</p> <p>著 者 名 狩野ゆき 発行所 近畿大学通信教育部</p>		
<p><b>設題（字数指定 2,000字）</b></p> <p>今や、「探究型学習」は小学校から中学、高等学校にかかるすべての教育課程で行われています。教育課程を支える学校図書館を任された司書教諭として、あなたがどのように情報メディアを活用する指導（情報リテラシーの育成＝情報教育）を行いたいのか、多くの場合司書教諭が学校図書館の専任業務で無かったりするなど校内でのかわり方も踏まえて、実行可能と思う情報教育の指導について、具体的に考察してください。</p>		
<p><b>レポート作成時の留意事項・ポイント（参考文献の記入または添付要）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テキストだけでは最新の情報メディアや学校図書館の動向について理解することが難しいところがあると思われます。別添の参考文献をはじめ最新の参考資料などを本学図書館や公立図書館の資料を利用して参照すること。</li> <li>・学校図書館の存在意義やその果たすべき役割・役割、学校図書館としてできる現実的なことを意識して論述してください。特に、学校図書館がおよそ出来もしない架空・仮想のストーリーにならないように注意をしてください。</li> <li>・引用や要約のルール（自分の意見なのか、参考にした文献・資料に書かれていたことなのかが明確にわかるように）引用部分は引用符（「 ” ”等）でくくり、引用符の後ろに出典を明記すること。引用・要約部分の引用符に番号をつけてレポート末にまとめる形式でも良いです。文中での引用の注記がなくて、巻末にのみ引用・参考文献をまとめて記入することのないように気をつけてください。当然ながら他人の著作の盗用は禁止です。テキストの課題に関する記述部分をそのまま、レポートに書き写すのがレポートの論述ではありません。以下に示す「引用と要約」の注意書きも参考にしてください。</li> </ul> <p>◎引用と要約</p> <p>引用は、自分の文章の中に、他人の著述した文章を取り込んで表現するスタイルです。著作権法的な表現をすると、「目的上正当な範囲内」で引用がおこなわれなければなりません。</p> <p>その「目的上正当な範囲内」で引用が行われるときには、著作権者の許諾を必要とはしません。「目的上正当な範囲内」で行われる引用とはどのようなものなのかというと、一般的には、以下の3つの要件を満たす必要があるとされています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①その著作物を引用する「必然性」があることと、引用の範囲にも「必然性」があることが必要です。</li> </ol> <p>通常は、引用先が創作性をもった著作物であることが必要であり、「どこそこのWeb にはこんな面白い記述があった」として、全文章を丸写しにしたものなどは、引用には該当しません（つまり著作権者への事前の転載許可＝許諾を要します）。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>②引用部分がはっきり区分されていることが必要です。</li> </ol> <p>引用部分をカギかっこなどの「引用符」でくくるなどして、自分の著述した本文と、引用部分とが明らかに区別できることが必要です。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>③文章の内容と量の点で、引用先が「主」、引用部分が「従」という主従の関係にあることが必要です。</li> </ol> <p>引用した人の側に表現したい内容がしっかりとあって、その中に、補強材料として原典を引用しており、文章の量としても引用部分の方が地の文より少ないという関係が必要です。ただ単に、レポート文章の分量を調整するための引用は、正当な理由の引用とは認めがたくありません。常識的に引用の分量は、全体の文章量の3分の1程度までです。</p> <p>上記のような点が曖昧だったり、いいかげんだと著作権侵害のおそれありと指摘される場合が出てくるのですが、実際こうした点を疎かにした引用（？）が提出されたレポートが多く見受けられるのが現状です。曖昧な引用の方法であったりすると、意識的に窃用（セツヨウ）していると判断される場合があります。</p> <p style="text-align: right;">[次ページへ続く]</p>		

引用には、「出所の明示」（引用部分の著作者名と、原作品名）が義務づけられています。表記の方法としては、前述したように、引用部分を「」（カギかっこ）でくくるなど、本文と引用部分が区別できるようにすることが必要です。引用に際しては、原文のまま掲載することが必要でして、内容を多少なりとも変更すると「同一性保持権」を侵害する可能性があります。

もう少し平易に書き直すと、たとえ通信教育のレポートであっても、自分の論述文章の中で、他人の表現している文章を取り込む場合は、引用符（いんようふ）＝かぎかっこなど（『』、《》、「”、[]、()、「」など）で、他人の文章をくくり、自分の文章とは区別していることが分かるようにしておく。ということです。

他人の文章とは、教科書（テキスト）の文章も同様の扱いをするということになります。

たとえば、情報活用能力の内容を「分類」して記述して説明する場合、自分自身のオリジナルな分類ならば良いのですが、これまで拝見してきたレポートの分類の記述については、どれも教科書や参考文献の分類をそのまま、（あたかも自分が考えた分類のように）記述していました。

引用の元の文章のあった場所（出典・シュッテン）あるいは（典拠・テンキョ）をはっきりさせるために、図書や雑誌の書名、著者、出来れば引用した部分のページを、引用符でくくったあとに、多くの場合はかっこ書き（ ）して表示します。

雑誌の場合は、雑誌名、刊行の号数、その文章のタイトル、その文章の著者を明記します。

通常は、引用符でくくり終わった所に出典を明記しますが、ケースによっては、引用符でくくり終わったところに、参考文献の番号を書いて、章の巻末にまとめて書くということも可能です。引用箇所は何ら印をつけなくて、巻末にのみ引用・参考文献をまとめて書くのは、引用のスタイルからは外れます。（どの部分が、どの引用元から引いたのかが不明だからです。）

引用のルールを守らずにレポートや論文を書いたりすると、他人の文章を盗んだと判断されて、レポートや論文そのものが無効の扱いを受けることがあるので注意をして下さい。また引用は、元の文章のまま自分の文章の中で使用することが原則です。長い文章だからといって、中味をかいつまんで表現すると、それは引用ではなく、【要約】という表現形式に変わります。

○引用、要約ともに、参考文献に記述されている引用文などをそのまま「孫引き」して使用せず、必ず原典に当たって確認してから引用してください。

◎「要約」も引用の時と同じように、要約部分を囲みの記号でくくり、出典の明記と、要約（例えば意識）していることを宣言する必要があります。

#### 《覚えの要点》

##### ○引用とは

- ・他の人の文章をそのまま自分の文章内で利用すること  
引用には条件がある
- ・文章を書いた人の同意は必要ない  
引用の条件
- ・本文作成上、どうしても引用しなければならない理由がある
- ・引用部分は本文全体の1／3程度である
- ・本文と引用部分が明らかに区別できる
- ・引用元が明示されている

##### ○要約とは

- ・他の人の文章を元に元の文書の考え方を変えずに短くまとめたもの

##### ○レポート作成には

- ・参考になる文章を読み、
- ・自分の観点を持って、
- ・自分なりの文章をつくる

ことが必要です。

- ・引用文献・参考文献のリスト（書名、著編者名、出版社、発行年）をレポートの最後に明示すること。
- ・用語は正確に使用すること。決定的に誤った用語は大きく論述の評価に影響します。
- ・自分自身は省略あるいは短縮した名称のつもりで使用していても、ほかにその表現で異なる別の意味の用語が存在する場合はしばしばありますから十分注意をしてください。

[次ページへ続く]

## 総評基準についてのメッセージ

- ・学校図書館の存在意義は何なのか。情報活用能力の育成とはどういうことを指すのか、司書教諭としての基本的な役目を考察すること。特に近年の学校図書館に対する国の施策などが、何をどのようにめざしているのかを考えること。そのためには常に最新の参考情報を得るように努力すること。
- ・テキストや参考文献の記述をただまとめることを求めるものではない。考察、論述の内容が自分の言葉で表現されていることを望む。
- ・基本的なレポートの書き方ができているか、(引用・要約)の明示。引用・参考文献の明示なども評価の基準となる。

## 参考書等の紹介

片岡 則夫	情報大航海術	リブリオ出版	978-4897845944
日本図書館協会利用教育委員会 編	図書館利用教育ガイドライン合冊版	日本図書館協会	978-4820401155
中村百合子 編著	インターネット時代の学校図書館:司書・司書教諭のための「情報」入門	東京電機大学出版局	978-4501619701
アメリカ公共図書館ネットワーク、アメリカ・スクールライブラリアン協会 著	インフォメーションパワーが教育を変える!学校図書館の再生から始まる学校改革	高稜社書店	978-4771100398
熱海則夫、長倉美恵子 編	子どもが生きる学校図書館	ぎょうせい	978-4324058695
根本 彰 編著	探究学習と学校図書館	学文社	978-4762022289
山本順一、気谷陽子改訂新版	情報メディアの活用	放送大学教育振興会	978-4595316494
中山伸一 編著	改訂版 情報メディアの活用と展開	青弓社	978-4787200419
二村 健 編著	情報メディアの活用 2版	学文社	978-4762020735
小林路子	多メディアを活用する力を育もう 教育の情報化と学校図書館	ポプラ社	978-4591081518
井口磯夫	情報メディアの活用(司書教諭テキストシリーズ05)	樹村房	978-4883670949